

## エンド・オブ・ライフケア

若葉の美しい季節になりました。

5月の連休に、前回お伝えした東京駅の丸の内側の街路を歩いてみました。

若葉がすがすがしく、石畳と外国から来た観光の人々の姿がよく似合っていました。

学会のプログラムと日程表が近くホームページに掲載されます。抄録集の準備も進んでおり、これに伴って会場の準備を進めていただいております。多くの皆さんのお力で学会の準備が進んでいることに改めて感謝申し上げます。

様々な人々との力を合わせて作り上げていくのが学会であることを、今回、大会長をやらせていただいて実感しました。

こうやって、日頃の皆様の研究や実践の報告が共有できる日のために、準備を進めてまいりたいと思います。

学術集会では7月15日にエンド・オブ・ライフケアについて、谷本真理子先生にご講演いただきます。いつか人間は死を迎えることは誰もが分かっていますが、長く元気で生きたいと願うのも人間です。

慢性病をもちながら生きることは、何かあるたびに、病状が進み、できなくなってしまう喪失体験を繰り返します。喪失体験があるとこれまでの自分ではないように思い、自己肯定感が持たなくなることもあります。病気をもちながら生活する人々の病態が複雑になり、それに伴って治療やケアも複雑になっています。そのため、私たちはAかBではなく、AとBというような両方を統合して考えていく力が必要ではないかと、谷本真理子先生のご講演では人生の最終段階を迎える人々へのケアについて深い示唆を得ることができるのではないかと期待しています。

平成30年5月6日 東めぐみ

